



民話「水の種」

山形県村山地方に「水の種」という民話が伝わっている。

「水に種がある」という発想が面白い。

※

『門伝村の百姓が、伊勢参りをした帰り、箱根の山で白蛇が子供にいじめられていたのを助けてやった。

その夜、白蛇の使いの者が来て、そのお礼をしたいと箱根明神の屋敷に案内された。

豪勢な屋敷で歓待を受け、おみやげに「水の種」が入った徳利を貰った。

村へ帰った百姓が、山の虚空蔵菩薩に参詣して、この徳利を供えようと、とめどもなく水が湧き出し、見る見るうちに山の中腹に四十八もの沼が出来た。

それ以降、村は水に困らなくなり、稲が実るようになった。』

『ふるさと伝説の旅・②東北みちのく夢幻』（小学館発行）に紹介されている概略は以上である。

現在「日本の民話」に収録され、児童用の教材として使われている「水の種」では、その背景は全く変わっている。

『昔、羽前国門伝村（現在の山形市）はひどく貧しく、池や沼や川がなかったため、稲も思うように作れなかった。

与左衛門はそんな貧しい百姓の一人だったが、高木の船渡し場を通りかかったとき、子供達に苛められている白い蛇を見かけて哀れに思い、買い取って逃がしてやった。

その日の夕方、再びそこを通りかかると、美しい娘が彼を呼びとめ、竜王の娘・乙姫と名乗った。

白蛇に変化して遊びに出かけ、捕まって危なかったところを助けられた。そのお礼として竜宮に招きたいという。

竜宮で夢のような日々を過ごした与左衛門だったが、やがて家に帰りたくてたまらなくなった。

竜王は「どれかを土産にさしあげよう」と目もくらむような宝物を並べたが、中に一つだけ、みずばらしい二本組みの白い徳利がある。

尋ねると、この中には「水の種」が入っているという。竜王に「こんなつまらないものを」と笑われても、水不足に頭を悩ませていた与左衛門には願ってもない宝だった。

与左衛門は、ふと目覚めた。みずばらしい自分の家だった。

今までのことは全て夢だったのだろうか。

がっかりしながらいつものように近くの山の虚空蔵にお参りに行くと、そこに夢で見たのとそっくりな二本の徳利がある。まさか、と思いながら一本を傾けてみると、中からは水が流れ出していつまでも尽きない。

しかも、気付けばもう一本の徳利からもこんこんと水が湧き出してきて止まらないではないか。水は溢れ、しまいには与左衛門は押し流されそうになってきた。

谷という谷に水は流れ落ち、四十八もの湖沼が出来た。与左衛門は座り込んで嬉し涙にくれた。これ以降、門伝村では水に困ることはなくなり、稲が豊かに実るようになったという。』

「高木の渡し」は、この村の近くにあったものである。「伊勢参り」「箱根明神」は現代ではその意味を失って省略され、「白蛇の恩返し」が主題となり、更に「竜宮伝説」に置き換えられている。

児童用教材として近年つくられた紙芝居の筋書きでは、次のように描かれている。

『村木沢村の田では、水がなくて稲が枯れそうであった。

困っていた百姓が、寄り集まって一人の代表を選び、箱根明神に雨乞いの祈願に赴かせた。途中、子供にいじめられていた白蛇を助けた。箱根明神で三・七、二十一日の祈願をしたとき、白蛇の御蔭で徳利に入った水の種を貰うことができた。』

『山形・村山地方の伝説』（武田正・東北出版企画）に収録されているのも、これとほぼ同じである。

ここでは「伊勢参り」は省略され、直接箱根明神へ雨乞いすることになっている。

この民話の舞台になっているのは、山形県山辺町の山間部にある湖沼地帯である。

「門伝村」「村木沢村」はその山麓にあり、江戸期からこの湖沼を水源として開発し、水利組合を作り維持してきた。

山辺町が町の紹介で採録している民話では、次のように伝えられている。

『昔、村木沢の三右衛門さんが伊勢参りをしたの帰り、箱根峠に近い川のほとりで、子供たちが大勢集まって騒いでおりました。見ると、白蛇を捕まえており、今にも殺してしまいそうでした。

三右衛門さんはかわいそうに思い、子供たちに「白い蛇は神様のお使いだから、いじめてはいけませんよ」と言って、白蛇を川に放してあげました。

その夜、一人のおばあさんが三右衛門さんの泊まっている宿を訪ね、こう言いました。「きょうは、私の娘が危ない所を、助けていただきました。お礼をしたいので、どうか私の家までおい

てください。」行ってみると、話に聞いている竜宮城のような神殿でした。

おばあさんは美しい少女を連れてくると、二人で繰り返してお礼を言いました。「あなた様は娘の命の恩人です。お望みのものがありましたら何でも差し上げますので、どうかお聞かせください」

そこで、三右衛門さんは「私の村は水が足りなくて米を作るのに大変困っています。なんとか救ってくだされば、ありがたいです」と頼みました。おばあさんは、三右衛門さんの欲のなさに感心し、一本の壘を渡し、「水の欲しいところに、注いでみてください。たちまち、きれいな水が湧くでしょう」といいました。

急いで村へ帰り、早速、近くに壘の水を注いでみたら、おばあさんの言うとおりにになりました。喜んだ三右衛門さんは、水源地にふさわしい場所を選び、水を注いだところ、みるみるうちに沼となりました。こうして出来た所が大沼です。

それ以後、三右衛門さんは、御神酒壘を家紋とするようになりました。また、壘をかついできた梅の木、結びつけた藤づるを土に差したところ、根を張り、葉が生い茂ったという事です。子孫は「開沼」と名乗り、これを後世に伝えるため、石に刻んで庭に建てたそうです。』

(作谷沢誌・作谷沢村役場刊より)

作谷沢村というのは、この湖沼地帯にあった一つの旧村名であって、昭和二十九年に山辺町と合併した。前掲の民話は、その作谷沢村が大正二年に収録したものである。

ここでは、「伊勢参りの帰り」に白蛇を助け、「箱根峠で竜宮のような神殿」に招かれたことになっている。

冒頭に記した概略に近い姿であるが、「竜宮伝説」と混同する伏線を持っている。

また、「家紋を二本の徳利」とする「開沼家」が村木沢に現存していて、代々この話を伝えてきただけでなく、畑谷・大沼の沼開きには毎年かかさず最初にお参りするという。開沼家の裏山には、いまでも藤の花がみごとに咲くと聞く。

## 付記・もう一つの「水の種」伝説

京都・祇園祭にちなむ「水の種」伝説がある。

祇園祭は、元来農村の虫害疫災を除く祭事であったが、疫病万端を祓うという伝承を持っている。

疫病神は胡瓜や瓜が好きで、祭りの日にこれを川に流すとそのたたりが消えるというのである。

また、この祭の間、あるいは祭以降は胡瓜・瓜を食べてはならないという。

胡瓜・瓜の種の中には、小蛇が入っていて、それを縦に切ると、大水がでると恐れられていた。

胡瓜・瓜などの種は、蛇が司る「水の種」でもある。

祇園社の紋は輪切りの瓜である。

瓜を縦に切ると種も縦に切れ、「水の種」が裂けて洪水になるという伝承は、祇園社の紋に由来するのかもしれない。

大阪府岸和田市の「七夕伝承」に、牛飼い星と七夕星の悲恋物語のなかで、次のような場面が描かれている。

※

#### 『岸和田市の夜疑(やぎ)神社に伝わる伝承』

「(瓜を)横に切りなさい。

縦に切ったら水の種が裂けて大水が出る。里の田畑はみんな水浸しになってしまうんや。お前かて溺れて死んでしまうぞ」 (中略)

一水がでたら…田あも畑も生き返る、里の人ら悦ぶやろ。うちは…うちは、どうなったかてかめへん。

切ろう、この瓜、縦に切ろ！

未弥(みや)は震える指で瓜を割った。

その裂けた瓜から、どどっと水が噴き出した。

後から後からきりもなく、ふくれた水は川となって、狂った馬みたいに和泉の野を駆け下った。

そのとき、未弥は、懐かしい笛の音を聞いた。川の面に星一つ。強く光った。

牛飼いの星、未登呂の星や。

「ああ、未登呂！」

未弥は、いとしい人の名を呼びながら、激しい流れに身を吞まれた。

天帝は未弥をあわれみ、天に上げて七夕星にした。

やっと許してもらった牛飼い星と七夕星は、天の川の兩岸に別れて住んで、カササギが橋を架ける七月七日、年に一度のはかない逢瀬に命を燃やすのだそうだ。